
UnderWay

革裂 空き呼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

UnderWay

【Nコード】

N0488P

【作者名】

革裂 空き呼

【あらすじ】

自由の為に、大切な人の為に、自分の道を貫く為に……どこまで出来ますか？

絶対的な力を持った王族の支配から自由をもぎ取りに行く大馬鹿者のお話

<・楽園と反逆と……> ; (前書き)

初投稿です。

批判、評価、感想の方よろしくお願いいたします。

ありふれたお話ですが、読んで頂ければ幸いです。

<・楽園と反逆と……>;

ラズフル歴1230年……

突如世界を襲った爆発と異変………

世界は、爆発と共に現れた、絶対的な力を持った邪悪なる王族が支配する地獄と化した。

爆発と異変から逃れた人々は、王族によってあらゆる自由、権利を奪われ執拗な迫害を受けていた。

そう、この物語は自由の為に戦った大馬鹿者のお話。

~~~~~序章~~~~~

/プロローグ/

>楽園建国<

ラズフル歴1250年~~~~~

魔道都市オーデイルにて…

かつて、此処は沢山の魔道師や召喚師で賑わっていた。

しかし、今となっては廃墟同然。

絶大な力の前に、自由を奪われ、抗う事を忘れ、王族に迎合した人々が住まう都市。

深夜……………

ハアツ、ハアツ、ハアツ…

人が全くいない路地裏に逃げ込む人影。

人影は、王族軍に追われている。

迷路のような路地裏を巧みに走り、一人二人と巻いて行く。

「何処へ逃げた！貴様ら、一人相手に何時までかかってる！」

隊長と思われる男の怒声が響いている。

人影は物陰に隠れ、様子を伺う。

バタ、バタツ

人影が、フと王族軍から目を離すと何かが、倒れる音がしたので、慌てて確認すると、軍人は全員地面へと沈んでいた。

充満するむせ返る様な、血の臭い……

月明かりの中に、一人の男だけが立っていた。

少しだけ見えた顔は、返り血で汚れ、手には、剣が握られていた。

男は、人影に気づくと歩み寄った。

人影は、気圧されその場から動く事ができなかった。

「追われているのだろ？また、直ぐに追っ手がくる。こっちだ……」

男は、人影の腕を掴み走り出す。

走りながらも、襲い来る王族軍を斬り捨て、血の雨を降らせて行く。

どれだけの人を斬ったかわからなくなり、太陽が昇り始める頃に、なつてようやく男は、走るのをやめた。

明るくなった事で、人影は、青年であることが分かった。

先刻までの、暗闇を写した様な黒い髪と目を持ち、精悍な顔つきをしている。

また、青年と同様に男の容姿もハッキリと確認出来る。

赤い髪、銀の瞳……

衣服は、返り血で汚れ、王族軍を斬っていた剣は鈍く銀色に光っている。

男は無駄や隙がない動きで、青年の方へと向き直る。

「あの追われ様……」

正規居住者では、あるまい。  
研究所からの脱走者だろうか？」

オーデイルの外れにある非道な人体実験を行う研究所の存在は、そこに住まう者ならば誰もが、知っている。

より強靱な、より忠実な、より機械的な兵士を作り出す為に、沢山の人間が収容されている。

収容されている者の殆どは、王族軍への反逆を試みた若者だ。

青年が真実を突き付けられ、言葉に詰まる。

「なんだ。違うのか？」

男は、鼻で笑いながら言った。

「答えないのなら、王族軍に突き出すまでだが……」

青年は、意を決して言葉を紡ぐ。

「違います……………」

でも、俺はもう、自由を奪われて生きてるのは沢山なんだ！！

もし、あんたが邪魔するなら、俺はあんたを殺しても此処から……」

「此処から出てどうする。王族の支配が及んでいるのは、オーデルだけではない。あれ程、美しかったラシベーナの都も今も此処とさほど変わらん。」

男は、青年の言葉を遮り静かに語る。

「くっ！ そんなの分かってる！ だったら、俺がその場所を作つてやる！

こんな、世界は俺がぶっ壊す！！」

青年の怒声が路地中に響き渡り、やがて静寂が訪れる。

男は顔色を変えず、小馬鹿にしたように話す。

「ほう……」

若い者が考える事は違うな。お前に出来るか？」

「出来るか出来ないかじゃない……やるか、やらないかだ。」

周りにいた奴らは、警備が厳重だからビビって、あの糞みたいな研究所からにげようとすらしてなかった。

出来ないから、やらない奴らばかりだ。」

青年の力強い言葉に、さっきまで淡々としていた男は目を見開いた。

「小僧……」

いや、勇敢な若者よ。名を教えてください。」

「グレン。」

グレン・リリエル。」

「グレン・リリエル。」

良い名前だ。

俺はお前に光を、希望を見た。

お前の作る樂園に、俺も加えてくれないか？」

グレンは、男の言葉に、驚きを隠せない様だったが、次第に嬉しそうな顔をした。

「も、勿論！」

あんたが、着いて来てくれれば、楽園まで近道が出来る！  
えっと……………名前は？」

「ジェスト・カストールだ。  
好きな様に呼べ、楽園の王よ。」

喋りながら、ジェストはグレンの前で、膝をおった。

その様は、即位したばかりの若い王に、先代から仕える騎士が忠誠を誓うそれに良く似ていた。

「そんな……………  
立ってくれ。」

でも、あの……………その……………俺が……………」

グレンは何か言いつらい事があるのか、口籠ってしまった。

「どうした？ハッキリと言え。」

「ただ、俺みたいなお僧が王で良いのになって……………  
ジェストの方が、威厳があって……………」

グレンの言葉から一拍おいてジェストに笑いが込み上げてくる。

「アッハッハ、ハハッ、」

人気のない、路地裏に本当におかしくて堪らないといった笑い声が響く。

「何が可笑しいんだよ！  
笑い過ぎだ！」

「やはり若い者が考える事は違うな！  
作るのは、お前だ。グレン。  
お前以外の誰がなるのだ。胸を張れ。」

そういつて、立ち上がりグレンの首に腕を回す。

「パーツと、建国記念に行くか。王よ。  
今日の酒は美味いぞ。」

「俺まだ、19なんだけど……………」

グレンが照れ隠しの様に悪態をつく。

「気のせいだ。  
気にするな。」

まだ、陽も高いうちから酒場へと二人の影は消えて行った。

ラズルフ歴1250年……

魔道都市オーデイルにて……………

小さな小さな反旗が翻った。

グレン・リリエル

ジェスト・カストール

そう、この物語は二人が自由の為に、楽園の為に戦うお話。

&lt;・楽園と反逆と……&gt;・（後書き）

この後、まだ続く予定です……

もう少しお付き合い下さい。

暖かく見守って頂ければ幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0488p/>

---

UnderWay

2010年12月30日00時56分発行